

第4章

【対話のあとで】全体性への想像力について

大澤 聡

3つの対話にはきっちりしたたたき台はなく、事前にいくつかのキーワードと論点をメールで伝達する程度にとどめた。対話的教養を掲げる以上、場の流れにゆだねるべきだと判断したからだ。とはいえ、時間をおいて文字起こしを読んでみれば、取りあげそびれた話題もあれこれ浮かぶ。そこで、エクストラコンテンツとして設置されたのが第4章の談話である。

ここには、拙著『批評メディア論』と呼応するテーマがいくつか含まれている。同書は近代日本の言論システムの生成プロセスを分析したものなのだけれど、じつは“幻の章”がいくつか存在した。「批評読者論」もそのひとつ。メディアや送り手側の環境だけではなく、受け手である教養主義的読者の実態も解析することにより、当時の言論空間の立体的な把握が可能になると考えていたのだ。けれど、章構成のバランスから収録は最終的に見送られた。『教養主義のリハビリテーション』はどこかその幻の章の分身のような側面をおびている。

3つの対話から1年以上をあけて、筑摩書房の会議室で収録された。文字としては「ひとり語り」の体裁をとってはいるものの、実際は目の前に石島裕之さんがいた。聴き手が存在しなければ、まったくちがう内容になったはずだ。つまり、第4章もまた対話の産物なのである。なお、過去に発表したインタビュー「デジタルとヒューマニティの交差点」（『DHjp』第3号、2014年5月）と、口述ベースのエッセイ「新たな対話論のためのメモランダム」（『精神看護』2017年1月号）の内容と重複する発言は、作業の効率と議論の補強を優先し、既発表分を部分的に再利用した。引用部分に含まれる歴史的仮名遣いは読者の便宜をはかるべく、現代仮名遣いに改めた。

（大澤 聡）

略

「放置型読書」の時代

いまは、「知っている」ことへのリスベクトが急速に低下している時代なんじゃないでしょうか。「いろいろ知っていてたしかにすごいけど、それって調べればわかることだよね」という批判の仕方がその典型です。知識だけあってもダメ、地頭じあたまのよさで勝負しましょうというわけです。

「知識より意見を」とか、「理論より実践を」とか、あの手の物言いには一理あります。知識偏重型の知性は限界をはらんでいて、過去にさまざまな弊害すらもたらしてきたわけですから。だけど、その物言いじたいがとつくにテンプレと化していて、いまとなつては不勉強や怠

慢の言い訳として便利に使われているにすぎない。「ゼロからオレが考えた」式の意見を素手でぶちまけあうことも、閉塞状況を打破するうえで、ときには効力を発揮するのもかもしれない。ですが、たいていは歴史上のあまりに凡庸なパターンにはまっついて、議論を無邪気に巻き戻してしまふ。せっかくの「歴史」のリソースを素どおりして、脳内で解をひねくり出すのは端的に非効率なんですよ。害悪ですらある。

自分のセンスだけを頼りに、おなじ場所をぐるぐるぐるぐる巡り続けるくらいなら（歴史を知らない当人はその循環に気づきようがないわけですが）、迂遠に見えても、先人たちが時間と労力と資金をかけて導き出した解や失敗をきっちり補助線として導入する。そうすることで、一歩でも二歩でも前に進めたほうがよっぽど有益だと思ふんですけどね。もちろん、立ち止まったり、議論を意識的に巻き戻したりすることも大事です。が、それはいろいろ知ったうえでなければ機能しない。

かつての教養、とりわけ教養主義的な教養は、どちら

かというところ、知っている状態それだけに意味が見出されてきました。けれど、「知っている」は課題解決や議論の前進のためにどんな「使う」。功利的でいいんです。そのために読書するし勉強もする。先人たちが最終的に示した結論だけではなくて、そこにいたる思考のプロセスじたいも知っておく。それは読書によつてしか知れないことです。未来予想を可能にする材料は現在や過去にしかありません。そして、過去は文字や書物というかたちでストックされてきました。必要なのはそれを解読する力です。

日本は「知識蓄積型」から「意見発信型」へと学習のモデルを転換しないとダメだとよくいわれます。けれど、あまりにいわれすぎたために、知識を欠いた薄っぺらな意見発信ばかりになってしまった。ここでも極端から極端へと振りきってしまう。第2章のおわりでも触れたように、個々の意見を尊重する相対主義的な教育がねじれて浸透した結果でしょう（多様性を尊重する教育はまったく否定しません。問題はそれが形式化の道へと墮落する瞬間

にある)。情報発信の敷居を劇的に下げたインターネットの負の影響でもあります。いまの学生は放っておいてもブレゼンはいまいんです。だけど、形式ばかりで中身がともなわない。自分の意見を組み立てるには、まず知らないといけないんですよ。「知る」と「意見」の適正バランスが見えなくなりつつある。

そもそも、「調べればわかる」式の反応をする人は、調べるためのレファレンスツールも知らない。たいていインターネット一択でしょう。調べるときに必要な確かな単語も知らない。そう、調べるにはまずツールとワードを「知る」必要があるんですよ。そこが抜け落ちているから、いざというときはほんとうは調べられない。入口を知らなければ、たとえ情報が存在したとしても、いつまでもたどりつけません。それがインターネットの基本構造です。だから、東浩紀さんは『弱いつながり』で、キーワードを探す旅に出る、つまりネットからときには離れて外側のリアルの世界に身をさらす重要性を強調したわけですね。

書籍とネット、現場とデジタル、それぞれの構造的なちがいを把握したうえで、状況に応じて使いわける。そして、有機的に組み合わせる。それができるかどうかでしょう。デジタルアーカイブを使いこなす能力は不可欠だけれど、なにをキーワードに設定するのは、アーカイブの外部で培う^{つちか}ほかない。新しいメディア環境における教養のあり方の一つは、第3章の最後で話題になったように、そうした複数のレイヤーに同時対応しうるリテラシーにある。

いまでは、膨大な知識やデータがネット上に転がっています。しかも無料で。そうした快適な環境が安易な「調べればわかる」式の発言につながっている。ですが、ネットではカバーしきれない領域はいくらでもある（パソコンの前に座ってネットを巡回して作成された「調べてみた」系のまとめサイトが現実世界といかに乖離しているか）。いうまでもなく、ネットに保存されないものが世の中の大半です。けれど、ネットを自然環境として生きはじめているわたしたちは、油断するといふそのことを忘れて

しまう。

もつというのと、「いつでもそこにあるわけだから……」という安心感が、実際には「調べる」作業を永遠に先延ばしにする。「調べればわかる」と高^{たか}をくくってしまふ人間は結局のところ、調べやしないんですよ。いつ調べればよいのか、そのタイミングも知らない。だから、おそらく「わかる」が来ないまま一生を終える。いろいろなものがアーカイブされる時代だから、それらがすべて自分の知識や能力であるかのように錯覚する。いつでも調べられるのだから、自分はもう知っているも同然だ、そんな勘違いの全知全能感をもってしまう。むしろ、「そこにある」と「知っている」とのあいだには無限の懸隔があります。テクノロジーの発達がわたしたちを錯覚させる。

この問題はアーカイブ論一般にも接続できます。無限にアーカイブすることが可能なデジタルの世界では、「解釈留保でかたっぱしから保存」が基本方針であるべきです。というのも、無価値にしか思えないゴミが、未

来では貴重なものになっていたなんてことはいくらでも起こりうるからです。とすれば、判断抜きでとにかく保存しておく、文脈や価値は後世の人間が必要に応じて発見すればいい。

ところが、他方でこうもいえてしまう。適切にタグ付けされていない膨大な情報たちは自己目的にストックされるだけで、将来的にも使えないんじゃないか。使えないというより、わたしたちはそれを使わないんじゃないか。「いつでも調べられる」とおなじで、「調べる」や「使う」が永遠に先延ばしにされてしまう。「いつでも」の「いつ」がちつとも来ない。膨大に存在するがゆえに、ひとつも存在しないのと変わらない。そんな皮肉な事態になりかねない。これは日々スマホやデジカメに保存している大量の写真なり映像なりの行方を思い浮かべると感覚的にも理解できるはずです。そのつど撮ることには熱心だけど、整理する機会はほとんどなく、膨大すぎるあまり、見かえすこともない。

これは数百年単位の文明論的なスケールでもいえるこ

とです。定期的にタグ付けや分類だけでもしておかないと、膨大な情報が無に帰す危険性がある。情報を解読するためのコードやコンテキストやシステムは時間とともに変化します。すぐ解読不可能になる。だから、そのつど註釈や装置をアップデートし続けないといけない。

『源氏物語』でも古文書でもなんでも、いまなお鑑賞可能であるのは先人たちが代々註釈を連鎖的に残してくれたおかげです。批評にはそういう役割もあるんですね。文学なんて……と思う人もいるかもしれませんが、たとえば東日本大震災以降、古い文献に何気なく記載された地震の情報ががぜん機能しはじめたことをわたしたちはよく知っています。

なかば思いつきのように、「拡散型読書」の時代から「放置型読書」の時代へ」と整理した理由がわかってもらえたと思います。「どこかにはあるから……」という安心感のために、実際にはちっとも読まない時代になっている。読んでいないのに、読んだも同然とおごりたかぶる。

略